

信 毎 歌 壇

小島 なお選

指差せば隠れてしまふ檜ヶ岳の頂に奈緒さんが
立つ (東御市) 関 啓
雪除けて直立不動の水仙が木曾の夜明けを宣言し
たり (木曾町) 新村 亮三
幾たびか目覚める雪の夜半にてひそやかに骨の密
度を計る (長野市) 近藤 光子
腹立てて殴って壊した洗濯機がムテープ貼り今日
も動かす (松本市) 竹内 千波
花桃と薔薇に鉄を入れゆけば狭きころに冬空ひ
ろがる (中野市) 大坂くみ子
なんにでもチャレンジすると目標の母は(すき家)
の入口に立つ (池田町) 小口 美和
コロナ禍を乗り越え村のスナックのネオンは招く
道ゆく人を (宮田村) 伊藤 正子
おはやうと言ひて飾りを集めに来 御座は無く
淋しきとんと (小海町) 依田 久代
あべかわを食べれば母を思い出さうと食べろ
あと一枚と (佐久市) 桜井 輝子
粒食のいつしかふえて十種類お腹の中で喧嘩しな
いで (佐久市) 里 香

選 評

第一首、アスリートの小平奈緒さんが
アルプス登山に挑戦する番組が年始に放
送された。近くてはるかな頂と奈緒さん。
第二首、すくくと立つ水仙のたたずまい
は真つすぐに挙げた腕のよう。まだほの

暗い景色に映える潔癖な白。第三首、窓の
外の雪と、身体の内側の骨。異なる白の無音
が響きあい、夜の底が深くなる。第四首、
行き所のない怒りは粘着テープの応急処
置では心もとない。ちゃんとケアが必要。

米川 千嘉子選

待ちわびる実家の柚はもう来ない亡母の如くに
亡義姉さん思ふ (小諸市) 尾沼美枝子
また道の怖さを知らぬ白杖のお疲れ受けてと産土
神へ (千曲市) 上原 博司
鳥をらぬ巣箱の穴を塞ぎたる雪の激しき北軽井沢
会いたくて武家屋敷当番希望する誰にも会わぬ日
を減らすため (長野市) 島田 悦子
登壇拒否され大泣き嫁お手上げその悪行は祖父似
と諭す (軽井沢町) 神戸 英明
田作りがかりかり甘くて美味しさと田んぼをしな
い孫が喜ぶ (泰阜村) 松島 房子
高齢にて食する糧は僅かなれど口にするものすべ
て楽しむ (御代田町) 伊沢 ミナ
フジテレビACジャパンのCM増えなんだかとて
も優良企業 (松本市) 中村 博穂
勤めいし亡き子の書類整理して押し入れに置く祖
母と並べて (長和町) 羽毛田 栄
「申し訳ございません」と天声で直角にお辞儀の
スクワットする (飯綱町) 小林 紀子

選 評

第一首、柚が途絶えた寂しさだけでは
なく、いつしか亡母のような懐かしさや
温かさを感じていた義姉を亡くした寂し
さ。第二首、使い始めるときは必ずお疲れ
を受けるという。白杖は大切に神聖なわ

が身の一部だ。第三首、巣箱に着目して冬
の厳しさを捉える。おのずと巣箱と鳥の
一年が思われる。第四首、観光客へ公開
しているのだろう。下二句のような切実
な動機で外に出ている人は多いだろう。

小池 光選

アインシュタインときほど重さの姿はらざるなつ
きを持ちて六十四年 (長野市) 原田 浩生
われにまた心に力満ちてこゝろ額あげて白梅の花に
真向かう (長野市) 近藤 光子
地球から石油終わればどうなるのにおぼあちゃんは
考えなくてよい (中野市) 増田きみ江
朱の文字ででっかく書きし貼り紙は「玄関ドアは
すぐに開けるな」 (長野市) 松本 博人
古書店のおやじの話す文学論は香茶の味が懐か
し (長野市) 宮沢 信博
還暦に職を転じて三十年鍼打つ日々を余生と言わ
ず (千曲市) 上原 博司
ガチャ目とあだなつけれられいじめられそんな私
がまだ生きている (千曲市) 関 津和子
草も木も虫・石・われも星のかけら偶然われはホ
モ・サビエンス (長野市) 島田 悦子
立つ風に夕さき波やゆらゆらと薔薇の花ゆるる浅
間のふもと (神奈川県横須賀市) 中沢奈津江
狭間より今年の冬も立ち上るあの爺さんの炭焼く
煙 (飯田市) 萩原 英文

選 評

第一首、脳の重さと知能は関係ない。
だから天才アインシュタインの脳とわれ
われ凡人の脳が同じ程度であっても怪し
むに足りない。ともあれ六十四年生きて
きたのである。第二首、力強い歌で気持

ちよい。たかが一輪の花といえど全身を
こめて真向かうときそれは世界そのもの
となる。第三首、本当にどうなるのだろ
う。化石燃料はいつかはゼロになる。た
だあと百年程度はもつらしい。